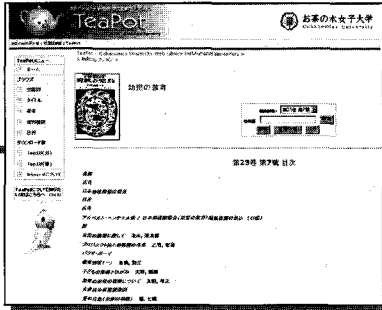


▶『幼児の教育』ネット公開に寄せて(8)

『幼児の教育』を通してみる 保育者の実践研究の歩み

小山みずえ



お茶の水女子大学附属図書館のWEBサイト内の「お茶の水女子大学教育・研究成果コレクション(略称TeaPot)」にてバックナンバーインターネット公開中。
URL : <http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/>

▼ はじめに

私は、今日に至る日本の幼児教育がいかに形成されたのかということに関心を抱き、これまでに明治期から昭和初期における幼稚園教育実践の展開を、保育者による保育内容・方法改革との関連において検討してきました。『幼児の教育』には、専門家による論説のみならず、保育資料、実践記録、調査・研究の報告、大会記事、保育会の活動記録などが掲載されており、それらはその時代の保育者たちがどのような思いで保育に携わり、いかなる保育実践を展開させてきたのかわかる上での重要な手掛かりです。掲載された記事のみで保育実践の全体像を描き出すことには限界があるとはいえ、本誌がネット上に公開され、興味のある記事を簡単に閲覧できるようになったことは、今後の幼児教育史研究の進展に、大きく寄与するものと思われ

ます。

『幼児の教育（婦人と子ども）』を創刊号から通読して強く感じるのは、当時の保育者たちが幼児教育の改善・発達に向けて活発な研究活動を展開させていたという事です。今回、本誌に掲載された実践関係資料を確認するため、絞込み検索で「著者」に「幼稚園」という語を含む記事を検索したところ、一二七件の記事がヒットしました。その中には、自然保育の記録、科学的調査・研究の報告、新しい保育内容・方法の紹介などがみられます。

そこで以下では、こうした保育者たちによる保育内容・方法の改善をめぐる動きを追いながら、ネット公開された『幼児の教育』の利用について考えてみたいと思います。

▼自然保育の普及

各地の幼稚園から寄せられた保育記録の中で特に目立つのが、自然保育に関する記事です。前述の検索結

果と合わせて、「園外保育」「林間」「自然」「観察」といったキーワードのもとで、実践関係資料をさらに詳しく検索すると、五〇件程度の記事をピックアップすることが出来ます。それによれば、大正・昭和初期には、園外保育と共に林間保育が盛んに行われており、神戸幼稚園による「夏期林間保育実施報告」（第十七巻第十号 一九一七年一〇月発行）がその最も早い例とみられます。林間保育は、一九二〇（大正九）三（昭和六）年にかけて各地の幼稚園でも広く実施されており、都市生活の弊害を軽減し、幼児の健康を増進することが、当時の幼稚園教育の主要な課題であったことがうかがえます。

また、こうした園外での自然保育に関する記事と共に、自然物を素材とした遊びの記事も見出すことが出来ます。とりわけ、江戸堀幼稚園の「自然物利用」は注目すべき実践であり、同園保母膳たけ（後に真規子と改名）から寄せられた次の記事の中では、幼児の巧

みな表現に学びつつ考案された、自然物玩具が紹介されています。

「自然物の利用（保育の實際）」

（第十二巻第七号 一九二二年七月発行）

「自然物の玩具に就て（一）」

（第二十八巻第十二号 一九二八年十二月発行）

「自然物の玩具に就て（二）」

（第二十九巻第一号 一九二九年一月発行）

「自然物利用の雛祭に就て」

（第二十九巻第二号 一九二九年二月発行）

「夏期休暇中に採集せし自然物に就て」

（第二十九巻第八号 一九二九年八月発行）

「秋の自然物梧桐の實及び其他の木の實の遊に就て」

（第三十一巻第九号 一九三二年九月発行）

さらに、「郡山市立郡山幼稚園の自然物應用手技に

就て」（第三十一巻第一号 一九三一年一月発行）と

題する記事には、江戸堀幼稚園の實踐に共鳴して自然

物の利用を試みたことが記されています。

このようにしてみると、大正期以降の保育現場では自然とのふれあいが重視され、幼稚園生活の中核に位置づけられていたことを確認することができます。従来から、幼稚園令における「観察」の制度化は、それまでの實踐を追認する形でなされたことが指摘されていますが、その実態をとらえることは非常に困難でした。しかし、こうした各地の幼稚園における取り組みを、ていねいに跡付けていくことで、「観察」の成立過程や、その後の展開が見えてくるのではないかと感じています。

▼幼児の発達への着目

次に、「調査」や「研究」というキーワードを入れて検索を行うと、現場の保育者たちが実施した調査・研究に関する記事が多数見つかりました。その一部を挙げれば、以下の通りです。

「空、風、雨、雷に關する幼兒の想像」静岡幼稚園

(第十二卷第五号 一九二二年五月発行)

「幼稚園一ノ組幼兒觀念界調査表」東京市阪本尋常小
學校附屬幼稚園

(第十二卷第六号 一九二二年六月発行)

「園兒繪畫觀察の様式 京都市保育研究会調査」

(第十六卷第七号 一九一六年七月発行)

「文字調査について」岡山市立五幼稚園

(第二十卷第三号 一九二〇年三月発行)

「幼兒の目測に關する研究」神戸幼稚園

(第二十五卷第五号 一九二五年七月発行)

「我が幼稚園に於ける訛言の調査」中村楠雄・和歌山

幼稚園

(第二十五卷第七号 一九二五年一〇月発行)

「幼兒の嗜好恐怖に關する調査」堀七藏・東京女子高
等師範學校附屬幼稚園

(第二十六卷第五号 一九二六年五月発行)

「幼兒の抽出検査」京都市保育會

(第二十八卷第二号 一九二八年二月発行)

「我が園に於ける群團テストの實際」東京市番町尋常
小學校附屬幼稚園

(第二十八卷第四号 一九二八年四月発行)

私は以前、神戸幼稚園を事例として、大正期の幼稚園教育における心理学の受容の影響について検討しましたが、今回の検査を通して、幼兒の心身の発達を調査・研究しようという動きが全国的にあつたことを、改めて確認することができました。

その内容を見ると、保育者たちが当時の最先端の理論を取り入れつつ、幼兒の実態の把握に努めていたことがわかります。たとえば、「園兒繪畫觀察の様式」は幼兒の精神を適当に指導するには、幼兒の觀察様式を知らなければならぬとの問題意識から、特定の絵画について、幼兒がどのような見方をするのかを調査したものです。現在から見れば、こうした調査・研究に

は方法上の限界があるように思われますが、日々の保育に追われながらも、保育者たちが幼児の実態を調査し、正確な幼児理解に基づいた保育方法の確立を目指していたことには、大きな意義を見出すことができま

▼幼児に適した内容をめくって

—「お話」を中心に—

「幼児の教育」には、童話作家、遊戯研究者、作曲家らの作品と共に、各地の幼稚園で生み出された保育材料が掲載されています。

今回、「お話」材料に注目し、「童話」「お伽話」「お話」「おはなし」といった関連するキーワードで検索してみると、「童話」一九二件、「お伽話」一六件、「お話」六八件、「おはなし」三三件がヒットしました（論説などを含む）。このうち、保育者から寄せられた作品を調べたところ、少なくとも四五件あることがわかり

ました。

これまでの研究では、大正期における「お話」の登場に注目し、従来の教訓主義的な談話材料が幼児を心から楽しませ、喜ばせるものへと変化する過程を検討してきましたが、そうした成果を踏まえた上で、今回の検索結果を見ると、一九二〇年代の作品のタイトルには、

「幼児にきかせるお話」お茶の水幼稚園

（第二十六卷第九号 一九二六年九月発行）

「幼児にきかせるお話 珊瑚のくびわ」新庄よしこ・

東京女子高等師範学校附属幼稚園

（第二十六卷第十号 一九二六年一〇月発行）

「星の子（幼児に聞かせるお話）」久門嘉祐・東洋幼稚

園牛込分園

（第二十七卷第七号 一九二七年七月発行）

「ライオンの赤ちゃん（幼稚園のお話）」久門嘉祐

（第二十七卷第十号 一九二七年一〇月発行）

「天狗の團扇（幼稚園のお話）」安間公観・岡崎市熱
岡幼稚園
(同右)

といったものがみられ、「幼児のためのお話」ということが前面に打ち出されているように感じられます。

特に附属幼稚園の作品は、①言葉遣いがやさしく、素朴な内容であること、②動物が主人公の話が多いこと、③擬態語や言葉のリズムが重視されていること、④反復形式が多用されていることなどを特徴としており、幼児の興味や発達への配慮が払われています。

さらに、一九三〇年代後半の記事を見ると、『幼児の教育』誌上で保育者に対して、「幼児童話」の懸賞募集が行われています。一九三五（昭和一〇）年から一九四一（昭和一六）年にかけて掲載された入選作品のみを数えても二十七作品あります。このように誌上を通じて、幼児の生活や地方色を取り入れた「お話」の創作が呼びかけられ、それに応じて保育者たちが創作を行っていたことは興味深いことと思います。

▼おわりに

本稿では戦前の資料を利用しながら、保育現場における保育内容・方法をめぐる動きについて述べてきましたが、歴史を通して形成された幼児教育の原理や実践形態などを今後に役立てていくためには、今日の問題を視野に入れながら検討することが不可欠です。今後、『幼児の教育』の記事が一九五〇年代以降についても順次公開されることは、日本の幼児教育の歴史を今日とのつながりにおいてとらえ、跡付けていく上で大きな意味のあることと思います。

他方、『幼児の教育』に掲載された記事は歴史的資料にとどまらず、今日の幼児教育を考える上でも重要な示唆を与えてくれるように思われます。本誌掲載の記事をネット上で容易に閲覧できるようになったことで、保育関係者にとって幼児教育の歴史がより身近なものになることを期待しています。（上智大学大学院生）